



村松農場における酪農教育

松 涛

№.32

2015. 3. 10

主な記事

同窓会長挨拶	2
今年度の活動計画	2
学部長挨拶	3
農学部を去るにあたって	4
支部だより	5
職場紹介 株式会社キタック	9
特集 恩師と語らう	10
ペンリレー 同窓生からのたより	11
研究室紹介	14
農学部フォーラム	15
国際交流	16
同窓会会計報告	17
学部だより	18

同窓会長挨拶

同窓会長

進藤

隆



今年の農業情勢は厳しく、米価の大幅な下落や局地的豪雪や豪雨による農作物被害等枚挙にいとまがない状況が続きました。

会員の皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか、同窓会活動に常にご高配いただいておりますことと厚く御礼申し上げます。

ところで「松濤30・31号」では新村学部長は「国立大学法人は一昨年公表された「大学改革実行プラン」に沿って学部ごとに特色・強み・担うべき社会的役割を明確にし、改めてそれぞれの学部のミッションを再定義するという作業に取りかかっている」と述べておりましたが、今年度の幹事会で説明いただきました。その内容を私が理解できた範囲で要約すれば(1)研究・教育の両面に渡りより大学院・学部の充実を図り、有意な農学系人材を育成する。(2)食料生産・流通、生物機能の開発と利活用、自然環境保全・自然災害等農学の諸分野の研究を推進し地域社会や農学の発展に寄与する。(3)地域との連携を深め地域社会の農林業・食品産業の振興や環境保全等に貢献する。

このミッションに基づき教員と学生が教育・研究に日夜精励しその成

果を出し社会的評価を高めていることに敬意を表します。

この変革の時に同窓会のサポートとしての役割がより重要になってくると思います。

今後、次項の活動に重点的に取り組む必要があると思います。

(1) 環境整備への支援

昨年は、同窓会60周年記念事業で「嵐丘庭」の復元整備と農学部のエントランスの改装を行いました。

嵐丘庭は、教員・学生の憩いの場だけでなく市民の朝の散歩や小学生の見学も多くありました。維持管理は学生・教職員・大学・同窓会で行われており嵐丘庭の樹木が期待したように生長するには、今後も整備に關する支援を継続し学生の母校愛が醸成されることを期待します。

(2) 農学を目指す意欲ある受験生確保への支援

少子化による高校生の減少するなか、農学を目指す意欲ある受験生の確保は重要なことで、教員による「高等学校への出前授業」・「高等学校での説明会」等へ教員が積極的に参加できるよう旅費支援事業を強化し、学生の資質向上を図る。

(3) 同窓会の活性化
昨年の「松濤」でも同窓会の活性化について若干触れましたが具体策を提言することができませんでした。

その後、他学部では支部の総会には役員や事務局が参加し意見交換を

行い活動に反映させているとのことでした。
同窓会にとつて支部活動は非常に大切であり、皆様のご協力で新潟県支部を立ち上げていただきました。しかし、7年間で首都圏同窓会、新潟県支部、長野県支部の総会に出席しただけです。

今後、各支部の会員に同窓会の活動を十分説明すると共にご意見を拝聴し活動計画に反映させてゆきたいと考えております。
予算の関係で毎年全支部に伺うことは困難ですが可能な限り実行してゆきたいと思っております。
平成27年は全学同窓会10周年を迎えます。記念事業への参加をお待ちしております。
最後に会員各位のご健勝とご活躍を願って会長挨拶とします。

2014年度活動計画

幹事長

箕口秀夫

本会60周年記念事業で造成された「嵐丘庭」を活用した交流事業等を通して、農学部同窓会活動の活性化に努めていきます。また、全学同窓会にもこれまで通り協力していきます。

5、学内諸行事への支援
・「卒業祝賀会」を支援します。また、退職者に記念品の贈呈を行います。
・全国農学系学部長会議の開催幹事校としての学部への支援を行います。

2014年度は、主として以下の活動に取り組みます。

6、学術・文化活動への支援
農学部フォーラムの共催をはじめとして各学科が行う学術・文化活動を支援します。

1、「松濤」32号の発刊
より充実した内容を企画して読まれる会誌を目指します。

7、受験者増加への取組みに対する支援
「高等学校での出前講義」や「高等学校での説明会」に行くための旅費の支援を行います。

2、同窓会ホームページの充実
充実した魅力ある情報をお届けできるよう更新に努めます。

8、全学同窓会への協力
運営委員会への参加、新潟大学カード入会事業の協力、大学との懇談会や全学交流会への参加、機関誌「雪華」の発送など他学部同窓会と足並みを揃えた活動を行います。

3、支部活動の支援
各支部の活動をより一層支援します。

4、「嵐丘庭」の維持・管理、有効活用
本会60周年記念事業で造成された「嵐丘庭」を活用した交流事業等を通して、農学部同窓会活動の活性化に努めていきます。

4、「嵐丘庭」の維持・管理、有効活用
本会60周年記念事業で造成された「嵐丘庭」を活用した交流事業等を通して、農学部同窓会活動の活性化に努めていきます。

4、「嵐丘庭」の維持・管理、有効活用
本会60周年記念事業で造成された「嵐丘庭」を活用した交流事業等を通して、農学部同窓会活動の活性化に努めていきます。

4、「嵐丘庭」の維持・管理、有効活用
本会60周年記念事業で造成された「嵐丘庭」を活用した交流事業等を通して、農学部同窓会活動の活性化に努めていきます。

4、「嵐丘庭」の維持・管理、有効活用
本会60周年記念事業で造成された「嵐丘庭」を活用した交流事業等を通して、農学部同窓会活動の活性化に努めていきます。

新
村
末
雄



長し、来年はどの程度成長しているか大変楽しみです。なところであります。今年1年を振り返り、新潟大学および農学部状況を説明させていただきます。

大と平行機大わ成る降差大とにう大望す員れつ革科りり年の長
学と成わ関学た26大が学し貢大学も。にてにが省状、度運の平
法に27れ別評つ年と学出にて献学をあま適お教求か況大は、営も成
人な年ま認価て12ものて配いす、機りた用り員めらに学、がと26
のつ度し証、月懸財き分まる全能、現さ、へらはあ、運開新、年2
第てにた。評、学7日念政ます。学規的文在、平のれ世り学費始執、月
2おな。価位年1さ状すれ。学模、科産、こ27俸お中す。予付し部日
期りつ最に授におれ況のる当の模、科産、こ27俸お中す。予付し部日
がまて終お与1よまはで運然、3の世学業と年制りか。予算金まにから
平すか的け機度びす、営、つ大界省界に度のまら。え様逼削た、る
成。らなる構実2。ら平費機に学的とかなか導す。見のはのし、よ、
27な公評訪に施日さに成交能区おな財らつら入。え様逼削た、る
年お表価調るれ両に、厳27付に別よ研務のてはも改る中し等平、
度、結果査大る日、く度によぶ地をは、一挙革大、中し等平、
終立るはが学、に平な以もてう域行は、要ま教ら一改文、いよ26学、

了することから、今後、第2期のまとめ、および第3期に向けての中期計画・中期目標を策定することになつております。

月15日と6日の両日にわたって、第130回全国農学系学部等事務協議会が、新潟大学農学部を当番校として東京のホテルフロラシオン青山で開催されました。この会議の担当は、平成14年春以来です。この会議の運営には、農学部職員だけでは間に合いません。農学部は、自然科学系事務部から4名の応援をお願いしました。初日の会議の後、情報交換会には、文部科学省および農林水産省からの来賓ととも、全国の農学系学部の学部長に参加いただき、新潟から持参した地酒および農学部の新雪物語を堪能してもらいました。お陰さまで、持参したお酒は好評で、無事会議も終了することができました。この会議の開催にあたりご支援を、農学部同窓会に多大なるご支援をいただき、ありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

一方、農学部の教育面では、平成24年度に文部科学省より採択された「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」が軌道に乗り、各種のインターシップ等を実施することによって「農力」の高い人材の育成および学部学生の就業力に大きく役立つための取組や農学部のキャリアフォーラム等の開催と学部的な就業力育成のための取組や農学部の就業率は、平成25年度の大学発行の読売新聞「就職に強いキング」で第4位のランクされました。

した。一方、大学生の採用ルールの開始時期に、卒業・修了前年度の12月から3月期に、また、選考開始時期を卒業・修了年度の4月から8月に、それぞれ繰り下げることが経団連より表明され、このような変更が農学部就職率にどのような影響があるか不明ではありますが、就職専門委員会を中心に学生への就職に関する情報の提供や就職・進学ガイダンス等を細かく行つていきたいと思つてゐるところです。

また、平成26年度から、新潟県、新潟農業・バイオ専門学校および新潟大学農学部とで、学生に農業に興味・関心を持つてもらい、未来の新潟県農業を担う経営者の育成を目指した「にいがた夢農業・人づくり事業」を実施してあります。この事業では、各種の共通講座やシンポジウムを開催し、新潟県内に新規就農する若者の育成に努めてあります。

さらに、平成24年度に「教育関係共同利用拠点」として文部科学省より認定されましたフイールド科学教育研究センター佐渡ステーションでの教育も順調に推移し、全国の大学の森林環境教育に貢献してあります。また、農学部の先生方が多数協力して「農学部先生方多数協力養成プロジェクト」という地域再生人材養成プログラムでは、平成26年9月に4期生69名（自然再生農林業（農業）コース6名、自然再生農林業（自然）コース6名、トキモニターコース13名、エコツアガイド（ベシック）コース7名、エコツアガイド（アドバン）コース5名、環境教育コース16名、環境行政コース6名）の修了生を輩出し、無事事業を終了いたしました。

深刻化する近年では、地域環境問題が国々の大学とも農学に関する研究交流が盛んになってきております。それに伴つて協定校を増やす必要があり、その考えから、平成26年度にはブトラ大学（マレーシア）および沿海

地方農業アカデミー（ロシア）と大
学間交流協定を締結するとともに、
これまで部局間交流協定を締結して
いたモンゴル国立農業大学との協定
を大学間に格上げして協定を締結し
直しました。なお、モンゴル国立農
業大学は平成26年からモンゴル生
命科学大学に改称しております。今
後はウメオ大学（スウェーデン）お
よびカセサート大学（タイ）との大
学間交流協定、部局間交流協定を締
結しているチェンマイ大学（タイ）
と大学間交流協定、ESA（フラン
ス）と部局間交流協定をそれぞれ締
結すべく準備を進めているところで
あります。

18歳人口が減少する中、どの大学
でも志願者確保は大きな課題となっ
ております。農学部でもこれ以上
志願者を減らさないよう、同窓会か
ら支援をいただき、教員が県外およ
び県内の高等学校を訪問し、志願者
確保に努めております。一方、平成
25年9月に連携協力に関する協定を
締結した新潟大学農学部、山形大学
農学部、秋田県立大学生物資源科学
部との3者で、高校生等に農学とは
どのような学問であるのかを啓蒙す
るためのパンフレット「人類の未来
を拓く農学」を作成しました。今後
は、このパンフレットを活用して、
農学とは、「こんなこともやっている」
「また、こんなことまでできる」
学問分野であることを広く高校生等
に周知し、農学に対する興味・関心
を抱いていただこうと思っております。

最後になりますが、学部長を拝命
したこの4年間、農学部同窓会には、
国際交流や広報の活動、また、卒業
祝賀会などの諸行事に多大なるご支
援をいただきありがとうございました。
今後とも、進藤会長をはじめと
する農学部同窓会の皆様には、学部
のサポーターとしてご支援とご協力
を賜りますことをお願いし、私の挨拶
とさせていただきます。

農学部を去るにあたって

退職の顛末

青 柳

齊（農業生産科学科）

主に健康上の理由から、停年まであと数年を残して、2014年度途中の10月末日をもって新潟大学を退職しました。50才代半ば頃に首の周りが痛み始め、右腕全体の下側と右手小指・薬指根元の手の甲部分に痺れを感じるようになりました。近くの整形外科医によれば頸椎椎間板ヘルニア症という診断結果で、変形した頸椎が首の両側にある神経根を圧迫しているとのこと。ついでに、慢性的な右肩の痛みは腱板断裂症によることが分かりました。デスクワークは控えるようにと忠告を受けたのですが、当時は鎮痛剤を服用すれば嘘のように痛みが消えたので、その後も相変わらずの生活となりました。

修了を予定していた留学生のD論指導の責任があつて、年度途中での変則的な退職となりました。

に多少とも関わっていきたいと思っています。

（了）

2年前に『中国コメ産業の構造と変化』（昭和堂）という編著を出版したさい、パソコンのキーボードを打つ日が続きました。ある日、何気なく横を向こうとしたら首元に激痛が走り、文字通り「首が回らなく」なりました。爾来、鎮痛剤の服用は日常的になり、医者からは、いずれ痺れが両手足に拡がり歩くことにも難渋するぞと脅されました。

とはいえ仕事柄、授業はともかく職場の会議に出ず、資料の作成や原稿書きを止めるわけにもいきません。思案の末、両手首に障害をもつ妻が家事に難儀していたこともあつて、大学での教育・研究を断念するに至りました。還暦を迎えた前年度末での退職もありえたのですが、秋

農学部に助手として就職した時期が1985年11月1日だったので、ちょうど在職29年間となります。その6年半後に助教授になって、卒論・修論等を責任指導した学部学生や院生（学内進学者を除く）は、計66名（修了生）で毎年3人ほどになります。その数は少ない方かもしれませんが、職場の同僚や同窓生ら多くの方々に支えられて、大学教育者としての職務を何とか全うすることができました。自己都合退職ということでもあり、職場での送別会（宴席）は辞退させてもらいましたが、これまでの周囲のご厚誼にたいへん感謝しております。

退職後の人生は健康管理に努めながら、好きな史跡散策や時代小説の読書などで過ごすつもりです。その一方で、大学院生時代から協力してきた（社）農業開発研修センター（京都市）の客員研究員として、引き続き国内及び中国の食料・農業問題



自宅での近影

支部だより

◆北海道支部

本年度第十八回目を迎える新潟大学農学部北海道同窓会の総会は、十月二十五日（土）に、十勝管内幕別町にある「十勝幕別温泉 グランヴィリオホテル」で開催されました。十月下旬と言うことで、路面状況が心配されましたが、峠等でも降雪は無く、絶好の十勝晴れとなりました。開催案内は毎回九十通ほど出していますが、当日、他の用務がある方も多く、総会出席者は七名でした。出席できない方からもハガキやメールなどで近況報告があり、総会で紹介しています。ここ数年、参加人数が減少傾向で、今後更なる参加の呼びかけが必要となつていきます。



総会では、五十嵐副会長（昭五）十一農

学）の挨拶の後、

平成二十六年度経過・会計報告、五十嵐副会長が出席

された新潟市での

同窓会常任幹事会報告、平成二十七年
度事業・予算案について協議し、
それぞれ承認されました。役員改選
では、全役員が留任となりましたが、
道央方面の幹事の増強が必要との意
見が出されました。

総会に続く宴会では、東条顧問（昭

三十六農学）による乾杯の挨拶のあ
と、近況報告等を行い、二時間余り
語り合いました。その後、二次会では、
用意してあった新潟の銘酒を飲
み比べる等、多めにあったはずのお
酒がほとんど無くなるほど、夜遅く
までの盛り上がりでした。同窓会も
再来年（平成二十八年）が第二十回
目となることで、一回目（平成九年）
からの写真等を整理し、纏めること
が出来れば良いのではとの意見が出
され、次年度の総会（平成二十七年）
で成田顧問（昭四十一農化）から提
案されることとなりました。

翌日の朝は、少し疲れが残って
いましたが、温泉で疲れを癒し、それ
ぞれ帰途につきました。

次回の同窓会は、平成二十七年秋
頃、道央方面で開催することとしま
した。会員の皆様、どうぞ気軽にこ
出席の程、宜しくお願い致します。

佐藤 誠一（昭60農化）

◆秋田県支部

昨年は、食糧増産の国策により八
郎潟干拓で生まれた大潟村が開村し
て半世紀。また、秋田県産米の主力
品種「あきたこまち」がデビューし
て30年という記念すべき年でした。
そんな中、皮肉にも「あきたこまち」
の概算金は、昨年より3千円も安い
過去最低の8千5百円となりました。
米の消費低迷と生産調整の廃止
決定などにより、米価の下落は予想
されていましたが、まさかこんなに
も早く下がるとは……。全国の産地・
銘柄でも概算金下落しているよう
ですが、稲作の比重が大きい秋田県
農業にとって影響は深刻な状況と
なっています。

さて、秋田県支部の総会は、6月
28日（土）に秋田キャッスルホテル
で20人の出席のもとに開催されまし
た。役員改選では、小島武志会長
（昭52卒）以下役員全員が留任とな
り、引き続き同体制で支部の活動を
盛り上げていくことを確認しまし
た。懇親会では、最初に新潟で行わ
れた常任幹事会について佐藤誠洋副
会長（昭58卒）から報告がされ、そ
の後の参加者全員からの近況報告で
大いに盛り上がりしました。

忘年会の開催は毎年12月第1週目
の土曜日としており、12月6日に18
名出席のもとに秋田駅前居酒屋で
開催され、今年の行事を締めくくり

ました。

秋田支部
の会員数は
現在83人。

行事への参
加者は、昭

和31年卒の
大先輩から

平成22年卒
の若手まで

幅広く（年
齢差55歳）、
人数も総会
と忘年会と
もに20人前
後と、最近
は数年前より
多くなつてきています。事務局と
しては今後もこの傾向が続き、参加
者を30人の大台に乗せられたらと
思っております。支部の皆さんのご
参加をお待ちしております。

鈴木 善彦（平3農）

◆福島県支部

今年も、十一月の吾妻の連山には
白雪が輝き、雪国の冬の訪れを告げ
る、吾妻おろしの北風が吹きつけて
います。

3・11の東日本大震災の影響が、
未曾有の被害をもたらした福島は、
あれから四年を迎えようとしています。
福島第一原発事故など震災復興の



足音には、乱れた状態が続いたままです。帰宅困難地区の帰還希望者は四割にも満たないと報じています。

福島支部活動も、170名会員の65%の方々が県職員で、過日、事務局長・沢田吉男さんを訪ねた時も、更に多忙な状況でありました。「幸い、このフロアーには新潟大同窓生が6名もいて、心強い」とのことでした。

今回の支部同総会の開催には、支部幹事の充実や総会の内容も、新潟大の先生や同窓会長のご招待を含め、新企画での実施を検討している状況でした。

この状況の中、九月二十九日に、越後長岡・蓬平温泉で、「農学科五期会」が開催されました。前回は山古志の震災地で、今回は長岡の復興の状況を、福島復興との関わりを重ねて確かめることができました。

一次会では、「農学部学生歌」で学生時代の想いを歌い、二次会では、原発問題、木曽御嶽山の事故問題、「般若心経」を含めての人生観の数々を語り合う姿が、いつまでも生き続ける人々の営みを感じながら、時の流れに想いを馳せました。翌日には、シテイホールプラザ・アオーレ長岡、きおくみらいシアターの見学でした。

中でも、シアターでの、「長岡の復興」「長岡の大花火」には、3Dによる映像化でもあり、迫力胸に迫る



もの。復興の状況が、福島復興と重なり、心を揺さぶりました。

今回は、新潟で、明日の日に生きる糧を求めて、また集う人々への

の想いを胸に、今日の日を過ごします。

高久 英昭 (昭32農)

◆ 首都圏支部

今年は東銀座・時事通信ビル13階の「ラウンジ日比谷」に会場を移して総会を6月7日(日)に開催しました。案内状はS25年卒の先輩から平成20年代卒の若い同窓生まで出ていますが、若手の参加が増えていません。当日の出席者は来賓を含め33名でした。

総会は、柳雅之幹事(農工S58年卒)が司会を務め、村上支部長の挨拶の際に、樋口春三初代会長に黙祷を捧げました。活動報告、会計報告、会計監査報告を行い、承認をして頂きました。続いて、紙谷智彦農学部教授から、「新潟大学の現状と農学部の今後―18歳人口激減期を迎えて―」「日本の人工林のゆくえ―林業の復

活と多様性の高い森」の演題で講演をして頂きました。紙谷先生は1月まで新潟大学副学長として大学の運営に参画されておられましたので、現在新潟大学が置かれている現状について詳しくお話をして頂きました。後半は、佐渡の天然杉の世代交代、スギ人工林が戦後植樹されてから50年を経過して伐採期を迎えていること、木造中高層建築への動向、針葉樹人工林から針葉樹・広葉樹混交林や自然林への再生、山間地林業の復活と高齢化した集落の若返りなどの話がありました。講演に対して質問や意見も出され活発に意見交換が行われました。記念撮影の後、懇親会に移りました。鈴木首都圏同窓会長・上野東京イノベーションクラブ常任理事から来賓のご挨拶を頂いて、金子前同窓会長の乾杯のご発声を受けて歓談に移りました。岩野君夫先生(農化S42年卒)がH26年春の叙勲で瑞宝小綬章を受章されたので、会より記念品を贈呈致しました。酒井仙吉先生(畜産S46年卒)が「牛乳とタマゴの科学」を出版しましたので本の紹介をして頂きました。今回、本田康邦さん(農学S44年卒)、宮内聡さん(農化S54年卒)、高田三千男さん(農工S58年卒)、白井善彦さん(生産環境H12年卒)が初参加をしてくれました。新しい方々が参加してくれればと活気が出ます。土屋彦治さん(農S31年卒)の音頭で「四季の新潟」を全員で歌っ



て、若桑道夫さん(農S35年卒)の中締めで会を終了しました。

毎年、数名づつですが初参加の方にも加わってもらえるようになってきました。又、平成26年度は首都圏同窓会として、「新潟大学基金」への寄付呼びかけを行った結果、全学で総数74名、そのうち農学部からは16名の方に寄付をして頂きました。集まった寄付金は全額寄付送金済で

す。文科省から大学への運営交付金も減額されてきて、大学運営も厳しさを増してきています。皆様からご寄付をして頂きましてありがとうございます。併せて、首都圏支部への年会費を納入して下さいました会員の方々にも厚く御礼申し上げます。

佐藤 純一（昭47農化）

◆新潟県支部

平成26年2月8日の第3回新潟大学農学部同窓会新潟県支部の総会において、前任の渡辺仁支部長から引継ぎを受け、支部長に就任いたしました白井敏彦（S55農学）でございます。現在は、県の長岡地域振興局農林振興部に勤務しております。

時間の過ぎるのは早いもので、私も県を退職するまで残すところ僅か



となつてしまいました。その間、仕事面において農学部の先生方には各種委員会や検討会等の委員に就任していただくなど色々な面で大変お世話になりました。

しかし、私自身が大学に対してこれといった恩返しや貢献が出来ていなかったのも事実でした。そんなことを考えているとき、「支部長を引き受ける」との話があり、ほかにふさわしい方も大勢いらつしやると思いましたが、多少なりとも恩返しが出来るとののかなと思ひ、引き受けた次第です。

さて、本題の新潟県支部の活動ですが、平成24年1月28日の設立総会からスタートし、第3回支部総会が平成26年2月8日に開催されました。72名の同窓生が出席され、超熟年からやや若者までの皆様が和気あいあいと楽しく過ごしていただきました。支部だよりも3号までを松涛に合わせ発行しております。今（平成26年12月時点）、第4回の支部総会の開催（平成27年1月31日）に向けて役員一同準備を進めているところです。会場も広い部屋を確保し、大勢の皆様に参加を呼びかけ盛大に開催したいと思っています。

残念ながら、原稿締め切りの都合でこの様子はお伝えできませんが……。

また、新潟県支部のあり方については色々な提案も頂いているところであり、2700名を超える新潟県

出身者を擁す新潟県支部を発展させるため、役員の皆様と一緒に頑張って知恵を絞って頑張りたいと思います。

白井 敏彦（昭55農）

◆長野県支部

秋晴れの里の紅葉も色とりどりに美しく目を引く10月25日に松本の「ホテルモターニユ」で長野支部の同窓会が開催されました。長野県は南北に210kmと広いので、多くの会員の皆様に参加して頂きたいということで、長野市と松本市で交互に開催しておりますが、今回も20人を達成できませんでした。幸いに今回は平成23年卒の農業生産科学科の女性の方に初参加して頂き良い同窓会になりました。本部から来られる予定でありました進藤農学部同窓会長さんが都合により急ぎよ来られなくなつたので、本部同窓会常任幹事会に参加された松坂会長から幹事会の内容の報告をして頂き、支部の活動・会計報告、支部役員選任等行い支部総会は終了し懇親会に入りました。恒例により参加者の近況報告が行われました。今回は趣味で楽しんで居られることや、学生時代に専門に学習された内容等お聞きしたり、学生時代の思い出話に花が咲きました。長野支部同窓会は今回18回目、2年後には節目の20回になりますので、記念総会にしようという話しに



なりました。近況報告の中で松坂会長は地域の神社の秋祭りには獅子舞の奉納を行っているとか、他に、笛を吹かれる方、太鼓をたたかれる方がおられることが話の中でわかり、記念総会には獅子舞を披露しようではないかと話が盛り上がりました。最後に当時は思い出しながら、学生歌、佐渡が島山、四季の新潟等を声高らかに合唱し次回元気で再会することを誓い終宴となりました。

今年は長野県では9月27日（土）11時52分に御嶽山（3,067m）で水蒸気爆発が発生し戦後最悪の57人の方が死亡されました。御嶽山は山岳信仰で知名度が高く「日本百名山」の一つでもあり、家族連れなどにも登れると人気の高い山であります。

当日は紅葉の真っ盛りで天気は良好、登山には絶好の条件で、発生時刻には素晴らしい景色を眺めながら昼食を取ろうと山頂付近に集まって居られた時の噴火で、多くの方が被災され、亡くなられた方も多くの追悼の思いでいっぱいです。また、11月22日夜には、長野県北部地震「神城断層地震」最大震度6弱が発生しました。特に白馬村・小谷村に被害が多く全体では、家屋の全壊が33棟、破壊が693棟、農地崩壊等も多く発生しました。豪雪地域でありますので、早急の仮設住宅の建設等、災害復旧に向けて厳しい状態が続いています。27年度は安全安心で生活できる穏やかな年になって欲しいと思っています。

西原 義久（昭16農工）

◆富山県支部

平成26年度の富山県支部の総会及び懇親会を2年ぶりに、11月14日に富山市の「自遊館」で開催しました。現在、富山県支部の会員総数は、394名（物故者、住所不明者含む）。そのうち住所を把握し、案内状を送付できた人は、345名、当日の出席者は、46名でした。

今回の出席者は、卒業年次が昭和30年代から平成20年代と年齢差が50前後あり、そのうち、河渡キャンパスをご存知の方が約1/3でした。河渡から五十嵐に農学部が移転し

て、40年以上経過していると思えます。当支部の総会・懇親会では、最後に、「農学部学生歌」と「四季の新潟」を全員で、声高らかに歌うのが恒例となっておりますが、五



「農学部学生歌」及び「四季の新潟」を声高らかに

十嵐キャンパス出身にとつて「農学部学生歌」は、学生時代には、実は、まったく知らなかったという人がほとんどで、わたしも富山県支部の懇親会で諸先輩が歌われるのを聞いて、何とか歌える ようになりました。『四季の新潟』については、今の学生のコンパの状況は分かりませんが、私が学生の頃は、六花寮（当時、関屋にあり、今は廃止され、五十嵐に新六花寮ができたとお聞きしました。）の寮生を中心に、諸先輩からコンパのたびに歌わされ覚えてきました。が、今回出席した若い人の中には、まったく知らないという人もいました。

た。正直これには驚きました。

話は、変わりますが、富山県では、平成27年3月14日に北陸新幹線が、金沢駅まで開通します。そのため、新幹線停車する「黒部宇奈月温泉駅」「富山駅」「新高岡駅」の駅やその周辺を含む施設整備が急ピッチで進んでおります。新潟に新幹線が開通して30年以上経過しました。もともと、当時は、大宮駅までで、その後、上野駅、東京駅と終着駅（始発駅？）が代わりました。新潟駅から大宮駅に新幹線で行くより、大宮駅から都内の目的駅までのほうが時間がかかっていったような記憶があります。これも、新潟の思い出の一つです。

坪田 安弘（昭57畜産）

◆福井県支部

今年の福井県支部は、平成25年11月29日（土）に、福井市内で総会を開催しました。曜日を週末にすれば、遠方の会員も参加しやすくなるかな、という思いがありました。残念ながら全然思い通りにはいきませんでした。それでも多くの同窓生が駆けつけてくださいました。

橋本孝一会長の挨拶に続いて、例年のように朝日泰蔵事務局長より会計報告をしていただきました。最後に私から近況の報告をいたしました。ここ3年ほど同じような流れです。

続く懇親会では、各自の近況を自



己紹介を交えて語ります。毎年、この内容を考えるのが大変なのですが、今年はネタがあつて助かりました（私的なことですが、県庁生活20年目にして家を建てました！）。

また、事前に欠席の連絡を多くいただいていたので、幹事の特権を濫用して料理を超豪華なものにしました。ちよつとやり過ぎだったかもしれませんが、来てくださった方への感謝の気持ちです。宴会慣れしている先輩方にも、「ちよつとやり過ぎだ！お前は！」と高く評価していただけました。

例年ですと、記念撮影を行いして恒例の学生歌を歌って締めとなりますが、支部役員の改選案で盛り上がり、学生歌を歌い忘れてしまいました。来年2回歌います。

橋本会長、朝日事務局長、長い間ありがとうございました。

あれ？私は留任ですか？

明間 基生（平5畜産）



職場紹介

株式会社キタツク

佐藤 豊（昭62農工）

【沿革】

株式会社キタツクは、1973年（昭和48年）に創業されて以来、新潟をベースに、北陸・東北・関東で、地質調査・土木設計を中心に業を営んでまいりました。この間、顧客のニーズに的確に応えるため、業務領域は、計画立案、調査設計、解析評価、施工管理、維持管理を一貫して行える体制を整えてきました。さらに技術面でも最新技術を導入し、隣接異業種のノウハウを修得しながら総合建設コンサルタントとして業務を伸ばしてきました。

【業務概要】

「総合建設コンサルタントとしての技術提供」

総合建設コンサルタントは、様々な分野の技術者が発注者の技術パートナーとなれることが求められます。当社は、地質分野、環境分野、土木設計分野、地域計画分野の技術者が多く在籍し、それぞれの専門部署で活躍しています。そして、これらの専門技術者が連携しプロジェクトを組むこと

により多様なニーズの業務に柔軟に対応できることが当社の最大の強みとなっています。

当社は、創業以来40年間に培われた経験・多彩な技術力・地域の地質情報を蓄積しています。

【防災への姿勢】

当社は、2004年7月の新潟福島豪雨災害、同年10月の新潟県中越地震、その後2007年の能登半島地震、新潟県中越沖地震と大災害を経験しました。

この復旧・復興には、各部門が連携して対応しました。災害に対する調査から設計までを一貫して対応する姿勢は、2011年の東日本大震災でも発揮することになりました。

このような姿勢は、防災に強い会社という評価をいただき『防災のキタツク』と呼ばれるようになりました。

【地域貢献、国際協力活動等】

弊社は、社会認識度を高め、世間での業の地位向上と企業としての信用度を高めるために平成10年に株式公開をしました。地質調査

業では上場企業は3社、建設コンサルタントを含めても10社程度です。

また、弊社は女性登用にも取り組み、次世代育成支援推進法に基づく子育てサポート企業（くるみん）として認定され、さらに新潟県ハッピー・パートナー企業（男女共同参画推進企業）として登録し、その取組を支援しています。

一方、障害者雇用促進法による雇用対策も積極的に進めています。

本社の別館にある「知足美術館」では新潟県出身作家をはじめ数々の作家の作品を展示しており、地域社会にゆとりと潤いを提供しています。

国際技術協力として、昭和54年に中国三江平原開発に加わったことを機に、その後、ODA採択となり、弊社が地質部門を担当しました。その間、中国で最初の建設コンサルタントの合併・独資会社を設立しました。一方、技術士を中心としたNPO組織を立ち上げ、近隣諸国との草の根技術交流を行い、現在は主にモンゴル国との橋渡しをしています。近年は、地域開発や新エネルギー、環境ソリューションなどの新規事業にも積極的に取り組んでいます。特に注目が集まる土壌・地下水汚染調査や太陽光発電事業、グラフィックデザインや町づくり・地域おこ

し事業などの地域住民や地盤産業と連携した事業を展開・計画しています。

当社は、「己の分際をわきまえ、貪りの心を起こさない」という知足の精神で優れた技術を社会に提供し、社会の発展に寄与していくことを進めています。

【当社の新潟大学農学部出身者】

現在、当社では、新潟大学農学部出身者は3名在籍しています。そのうち2名が土木設計技術者、1名が地質調査の技術者です。土木技術者は、道路関係、砂防関係の設計業務に携わっており、地質調査の技術者は、平野部の地盤解析業務に携わっています。

新潟大学農学部出身者は、このように広い分野での技術者として活躍しています。



土木技術者と地質技術者がお互いの専門性を活かし連携して砂防堰堤の老朽化調査を実施している様子

恩師と語らう懐かししの時代 シリーズ・対談

恩師 小島 誠 名誉教授

元・農学部長、大学院自然科学研究科長

対談者 滝沢 勤さん 佐野 義孝さん
高橋 亘さん 藤 晋一さん

言ってしまえば
ひとつの家族に
なるわけですから

——先生、今回の対談はこの
園々を巡られた理由とは？
小島 えーっと、できるだけ
悪万々と言うが、学生時代に
僕がさんざんいじめられた連
中を集めました(笑)。
滝沢 いきなり何を言われる
んですか！
小島 まあ、真面目に言う
と、滝沢君は私が新潟大学に
赴任した年の学生で、言わば
長男で、佐野君と高橋君は
その何学年か下の同期で、
藤君はさらに下の、この中で
は末っ子的存在かなと。
——先生の研究室は、本当に
家族みたいな感じだったんで
すよ。僕がいた頃も、すでに卒
業された滝沢さんが夕方に酒

を持って現れる、とか(笑)、す
ごくアットホームでね。
小島 あと、みんな、我が家
にも呑みに来たりとかさ。
——やはり、お酒の話は避け
られないようですね。
小島 そりゃそうだよ！ だ
うて、大学で大事なものは、人づく
り。(研究室では)性格も出身
地も違ういろんな連中が、言っ
てしまえばひとつの家族にな
るわけですから。その人づくり
のために、僕は現場主義でこ
とを言っていて。僕は植物
病理学が研究テーマでした
けど、とにかくみんながフィー
ルドに出て、一緒に飯を喰って
酒を呑むと笑。そういうプロ
セスを経ていくうちに、いろん
なことを知り、自分で判断で
きるようになるんです。教科
書での勉強は大学生なら黙っ
ていてもする。でも、そこから
離れた現場で、どこにも売っ
ないものを学ばせてこそ大事
だと僕は思っています。

高橋 実際、例えば津南に
行って、畑を見て、自分の目で
ウイルスを探すってことをよ
くやっていたんですよ。「ウイル
スハンディック」と呼んで。
小島 まあ、大変だったかも
しれないけど、みんな、それに
耐えてくれたからね。
滝沢 耐えるなんて感覚じゃ
なく、楽しかったんですよ。
実際にどういう病気がどんな
風に植物に出るのかは、本当

にフィールドで見ないと分から
なかったりするし。
藤 で、その現場には、学生
と先生だけでなく、例えば新
潟県農業試験場のスタッフと
一緒に行った日もあったんで
す。
小島 その中で、学生が初めて大
人の社会に触れ、大人とつき合
うってことも学べましたし。今
考えると、それもすごく大き
な経験になりましたよね。
滝沢 そう。まだインターン
シップもない時代だけど、実
はそういう社会を知る試みも
僕々はやっていたという。

——佐野さんも今、教える職
業に就かれています。先生
と過ごした時代がルーツに
なっているんじゃないですか？
佐野 まさにそうですね。卒業
後も、先生の助手をやらせて
頂いたり、ほぼ半生を二歳し
ています。とにかく先生
は、包容力と言うか、人間力
と言うか、とても人を惹きつ
ける魅力のある方だと思いま
す。そもそも、ひと声かけれ
ば卒業生がこれだけサッパと
集まるんですから。

小島 まあ、お金がなくて
良い条件で実験したい——そ
のためにはいろんなことを工
夫し、楽しんできると。そんな
僕の遊び心につきあってくれ
た連中だからねえ。
高橋 僕は今、植物ウイルス
の研究とは全く別の業を作る
仕事に就いています。今、
ウチの研究所には50人ほどの

研究者がいますが、専門性が
違っても、あの頃の小島先生
が見せてくれた研究に対する
情熱——その情熱を如何に
所員に共感させられるかが、
強い組織を作っていく上で大
切なことだと教えてもらった
気がします。ホント、大事なの
は情熱ですからね。それがす
ごく強い先生でしたし、今
の僕があるのも小島先生のお
かげだと思っていますよ。
——先生、ちょっと聞かれてい
らっしゃるようですが？

小島 ……何か、みんな、ちゃん
とした大人になつたようで、
とても嬉しいよね。



撮影協力：江戸っ子
(新潟市西区内野町998-1
/tel.025-262-3404)

滝沢 勤さん

新潟大学大学院農学研究科を昭和
55年3月に修了。現在は新潟市(食
育・花育センター)で農学普及員。



佐野 義孝さん

新潟大学農学部農学科を昭和60
年3月に卒業。現在は新潟大学 自
然科学系(農学部) 准教授。



小島 誠
名誉教授

昭和13年生まれ。昭
和61年より新潟大学
農学部教授に。専門
分野は植物病理学、農
学部長、大学院自然科学研究科長などを
歴任し、新潟大学の発展に資する。津山
をこよなく愛し、書も名人の域。現在の農学
部中野(東野)「5A」の緑地は
小島名誉教授の書によるものだ。



藤 晋一さん

新潟大学農学部農学科を平成元
年3月に卒業。現在は新潟県立大
学 生物資源科学部 准教授。



高橋 亘さん

新潟大学農学部農学科を昭和60
年3月に卒業。現在は第一三共林
式会社 バイオ基礎研究所 所長。



同窓生からのたより

直にうれしいです。

② 熱中しているもの

漫画、ゴルゴ

里山文化の伝承

高橋 正樹（平6林）

① 現在の仕事

造園・庭師をやっています。今の会社に入ってから15年、職人として庭石・庭木の扱いから、



公共工事の現場代理人等いろいろ経験してきました。一応、一通りなんとか出来るかなとは思いますが、まだまだ毎日が勉強です。植物相手なので、生育も教科書どおりには行かず経験も大事になってきます。また、庭造りや庭の管理では、お客様の好みや感覚、生活スタイルも様々ですので答えが一つではないような仕事です。それだけ、遣り甲斐もあり気を使うこともあります。お客様から喜んでもらえた時には、やはり素

13です。昔は、字が多く、主役も表情が無く面白くないと決め付けていましたが、ゴルゴのプロ意識・冷静沈着・腕前・体力、どれをとっても凄いの一言ですが、ストーリーがまた凄いです。よくぞ海外の裏の情報を集めたものだと感じます。現在世界情勢は不安定で変化も激しく気になります。ゴルゴでしつかり勉強していきたいと思っています。

③ 最近感動したこと

ダイヤモンド☆ユカイさんの講演会を聴いて来ました。御自身、まだまだ小さいお子さんがいてその子育て話を面白可笑しくお話されましたが、共感できる所も多々あり、目が潤んできました。そして、最後にNHKみんなのうたでも放送された「ムクロジの木」を生歌で聴きました。心に迫ってくる歌声に涙しました。ロックシンガーとして活躍されていますが、一人の父親としての面もわかり親しみをもてた講演会でした。

④ 同窓会の皆さんへ

現在、新潟県阿賀野市にある（一社）五頭自然学校で休日森林整備や

子供たちと一緒にワークショップを行ったりしています。日本の素晴らしい里山の文化伝統、自然環境等は子や孫の代にも残していきたいものです。

森林整備の大切さを子供たちに教えていくと同時に、子供たちが楽しめる森林を作っていきたいと思っています。もし興味がある方、週末にでも汗をかきにきませんか？

⑤ 次回の執筆者のご紹介

高澤（浅石）理子さんです。県立鳥屋野潟公園で業務を引き継ぎましたのでペンリレーも引継ぎをお願いしました。

体験は財産

勝 又 信 也（平6農工）



① 近況報告

平成6年卒業後、地元岐阜県に戻り建設会社勤務を経て岐阜県庁に

入庁し、農業農村整備事業に携わっております。通常2〜3年で所属が異動となり、県庁内では他部局・他機関との調整や各種補助事業の執行管理、出先機関である農林事務所

は主に工事の設計・積算・施工管理を行っています。

② 趣味、または熱中していること

岐阜県職員になって最初の勤務地である高山市は、周辺に多くのスキー場がある恵まれた環境だったため、冬になると毎週のようにスキーやスノーボードに出かけていました。最近では子供を連れてキッズゲレンデでのソリ遊び専門となっています。車とバイクも好きでしたが、こちらも子供が成長するまでしばらく我慢。そこで新たな趣味になったのが登山。30歳を過ぎてから友人に誘われ始めたところ、下界とは異なる雄大な景色や山小屋から見る星空に魅せられて、今後も続けたいところ

③ 最近、感動したこと

最近試乗したマツダデミオに搭載されているディーゼルターボエンジンに感動。1・5Lとは思えないトルクの太さで、他の国産同クラスでは味わえない気持ち良さがあり、通勤用のセカンドカーとして欲しくなりました。

④ 大学、同窓会、学生の皆さんへのご意見、ご提言

大学時代、私は「農工の猿」との異名がありました。きっかけは、ク拉斯の友人と里山へ遊びに行き、山の中で見つけた柿が「甘柿か渋柿か」

雑感

高石 真理子（昭58農化）

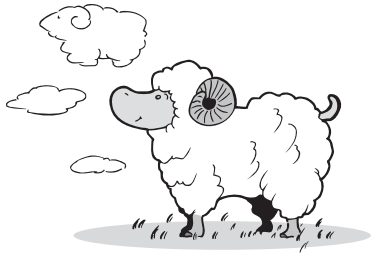


二十年勤めた美術館を退職し再就職して早いもので四年となりました。新しい職場は

で意見が分かれた時、スルスルと柿の木に登って実を取ったことに由来するようです（結局渋柿でした）。あれから約20年が経過し、分からないことはすぐにスマホやインターネットで答えが見つかる時代となりましたが、時間がかかっても実際に体験して得た答えはいつでも記憶に残ります。学生の皆さん、ぜひ体を動かし、実際に見たり触れたりする機会を大切にしてください。

⑤ 次回に執筆して頂く同窓生の紹介

この数年間、平6卒業の同級生が続いておりましてので、平成13年に大学院を卒業し、現在岐阜県職員の後輩である塚田真一郎さんをお願いします。

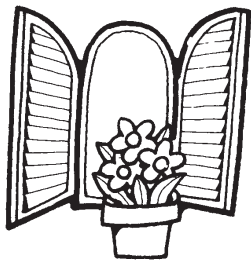


競争の激しい食品メーカーです。売り上げ、競争とは無縁の仕事をしていたためなかなか慣れませんが、「安全・安心・そして本物の商品を」という社是のもと、社員として良質の商品を提供できるということはとてもありがたい事です。随分昔に農学部を卒業させて頂いたのですが、それでも基礎的なことはまだ覚えているもので役に立っているようです。仕事も大切ですが、若い人たちが元気で輝ける職場になるよう努めているつもりです。

食品メーカーに勤めてから、食べ物について考える事が多くなりました。特に年齢を重ねると身体の大切さ、食べ物が身体を作るということを実感として感じます。本当に身体が欲している食品とは何か。安価な商品、ファストフード、コマーシャルリズムに乗った商品などに惑わさ

れることなく自らがしつかりとした消費者になりたいと思います。

さて、会社には毎年秋から冬にかけて、市内・市外の小学校三年生が毎日のように工場見学に来ます。少子化の影響で、街の中心の小学校はクラス、合併で大きくなった周辺の小学校は四〜五クラスです。時には保護者の方も来られます。子供達一人一人は元気いっぱいなのですが、先生の指導法で全く子供達の反応が違うのに驚きます。静かにメモを取る子、後ろを向いたまま少しも話を聞かない子、走り回る子、目を輝かせて聞いてくれる子、私にくっついて離れない子。手を焼く子供達も多いのですが、皆それぞれにいい、そして楽しいひとときです。さて、この授業、子供達にきちんと伝わっているのでしょうか、少し不安でもある毎日で。



新潟の畜産

村山 剛（平14農生）



社会人となり12年目を迎えました。農学部を卒業後、新潟県に農業職で採用され、こ

れまで畜産技術の普及や畜産行政など、主に畜産関係の業務に携わってきました。家畜育種繁殖学教室で学び、研究してきたことが今でも役に立っています。

社会人となつてからのこれまでを振り返ると、県に採用された当時は仕事があり面白くなかったように記憶しています。しかし、5年目くらいから仕事に対して自分の考えを持つことができるようになり、徐々に仕事が面白くなってきました。たくさんの人との出会いや仕事での経験が自分を成長させたのだと思います。

これまでの仕事で最も印象に残っていることは、平成16年の中越大地震の対応です。震災当時、長岡に勤務・居住しており、余震が続く中で災害対応に当たりました。ここでは語りつくせませんが自分にとって貴

重な経験となっています。

10年以上新潟の畜産に携わってきたわけですが、採用された頃と状況はだいぶ変わってきています。当時、県内の乳用牛だと、飼養戸数420戸、1万4、000頭の牛がいまいたが、現在では、220戸、8、000頭と、この10年ではほぼ半分になる急激な減り方です。大きな社会の流れとして、この方向性は変えられないのかもしれませんが、新潟の畜産に携わる者として何ができるのか、常に考えて仕事をしていきたいと思っています。

光陰矢の如し

松井基晴（昭52農）



① 近況報告

私は卒業後に新潟県庁に就職し、平成25年4月から長岡市にある農業総合研究所に勤務しています。

農総研の大きな課題は、温暖化に対応できるコシヒカリより遅くより良食味の晩生新品種の育成です。平成29年度からの一般栽培に向け最後の追い込み中です。もう一つは、新

潟県が今後とも「米王国」として君臨するため、これまで産官学が蓄積してきた研究成果・知見等を持ち寄って新たな米産業を創出する研究会を今年度立ち上げました。成果はこれからですが、この取組には門脇副学長、大坪教授はじめ農学部の新生方にご尽力頂いており、この場を借りて御礼申し上げます

② 趣味または熱中していること

前任地の上越市では昼休みに高田公園を、現在は出勤前に蒼柴神社に参拝し悠久山公園を歩きます。桜と鶯、新緑から紅葉へ、そして雪景色と四季の移ろいを楽しんでいます。

③ 最近感動したこと

年々感動が少なくなりましたが、気がつけば「定年」となります。光陰矢の如し、感慨ひとしおです。

④ 大学、同窓会、学生の皆さんへ のお願い

仕事の関係で大学にお邪魔する機会があると、自分の在学中に比べてその変わり様に驚きます。今後とも時代を先取りして周りをアツと言わせるような取組を期待しています。

⑤ 次回に執筆して頂く同窓生の紹介

同じ長岡地区で勤務している同級生の加藤仁さんをお願いします。

研究室紹介

キャリアジム運営センター

特任教授 里村孝一

◇新潟大学農学部では、就業力の育成に力を入れています。これまでは、一部試行を含めて実施してきましたが、平成26年度からは「サテライト学修」と名称を改め、全て正規の教科目として実施することになりました。これにより、第1学年から第4学年までを通して、農学部での学修と実社会を結びつけ、実践的な現場適応力、地域社会貢献への強い意識、様々な課題に根気よく取り組む力や問題解決能力を段階的に身に付けてもらい就業力の向上、社会人基礎力の向上役立てることにあります。

◇サテライト学修の目的と流れを概説します。

第1学年が対象の『地域交流サテライト実習』では、視察研修を中心に「企業等の事業活動」を知ることになります。一人が3つのプログラムを選択して参加します。25年度では、ほとんどの学生が選択して参加しています。

第2学年が対象の『基礎農力』（実務者教育Ⅰ）では、企業等で実際に



PBL型インターンシップ実習風景

生は自分の進みたい方向や知りた
い実務対応などが見えてきたとし
て好評でした。

第3学年が対象の農学部3学科
の「インターンシップ」は、「実際
に企業等で働いてみる（就業体験）」
です。この体験には、企業等の就業
体験と課題解決の両方に取り組む
PBL型インターンシップもあり
ます。PBL型インターンシップは
まだ少ないですが、25年度は、7事
業所で受け入れていただきました。
この通常の就業体験型とPBL型
のインターンシップを合わせて、学
生の50%が参加しました。参加学生
の多くは、働くことの楽しさ、また、
これから何を学ぶべきかを理解す
るとともに、考える力、提案する力
など社会人として必要な基礎的な
力の向上が大きく見られました。

第4学年が対象の『応用農力』（実
務者教育Ⅱ）は、業界、企業等のトッ
プクラスの方に大学へ出張した
だいての講義をしてもらい、それを
通して、「業界、企業等の動向や活
動と、問題と課題」を大きな視点で
知ってもらうことになります。それ
を踏まえて、自己のワークシヨップ
を含め、学部卒業後に、将来成し遂
げたいこと等への道筋・活動の明確
化にもトライすることになります。
◇キャリアアジム運営センターは、農

学部独自のサテライト学修に加え
て、文部科学省「産業界のニーズに
対応した教育改善・充実体制整備事
業」を継続実施しています。平成24
年度から平成26年度までの事業で、
現在、関越大学グループ18校と産業
界と連携して「産学協働による学生
の社会的・職業的自立を促す大学教
育の開発」を実施しています。特に、
農学部が直接関わり進めているのは、
学びを実践に活かすための「自律
的人材育成のためのPBL型（課
題解決型）インターンシップの高度
化」で、インターンシップの実施を
重要と考えています。キャリアアジム
運営センターは、この二つの活動を
通して、社会に自立できる能力、農
学・農業の様々な問題・課題に対応
可能な「農力」を持った人材の送り
出しを推進しています。産業界から
のご理解とご支援をお願いいたし
ます。



「新潟大学村松農場の牛乳で作ったアイス」 販売中です

農学部附属フィールド科学教育研究センター村松ステーション
（旧附属農場）で飼養している乳牛の牛乳で作ったアイスミルクが
昨年度から商品となり、大学生協等で販売されています。新潟大
学にお越しの際にはぜひご賞味ください。ミルクの他、五泉市の
川上農園さんのエゴマ、株式会社サンファーム泉さんのアロニア
ジャムの味があり、今後、季節の味を増やしていく予定です。こ
の商品は大学院の「農と食のスペシャリスト養成」プログラムの
ミルクプロジェクトの歴代のメンバーが関わって作られています。
カップのラベルは農学部の卒業生のデザインです。現在、五
泉市ふるさと応援寄付金（いわゆるふるさと納税）の特典品にも
ラインナップされています。



第20回農学部フォーラム開催報告

第20回農学部フォーラム実行委員会委員長 粟生田 忠 雄

1 はじめに

2014年12月13日、新潟大学五十嵐キャンパスの中央図書館ライブラリーホールに於いて、第20回農学部フォーラムを開催しました。テーマは、「里地・里山の食料生産と環境をまもる人と自然のキャッチボール」でした。まず、新村末雄学部長からの開会挨拶の後、中野和弘学科長による趣旨説明、4名の教員からの問題提起、引き続きパネルディスカッションを行いました。

当日は、大雪にもかかわらず学内外から100名以上の参加で成功裏に終えることができました（参加者内訳は、一般35、行政関係5、学生45、教職員4、スタッフ20）。

農村計画、農業環境工学、森林生態学、砂防工学の各分野からの問題提起には、参加者から多くの質問や意見を頂きました。引き続き行われたパネルディスカッションでも、活発な討論が行われ、里地・里山における人と自然の関わり方のベクトルが少なからず示されたものと考えます。また、参加者アンケートでも好評を頂きました。

2 オープニング

冒頭の学部長による開会挨拶においては、地球規模の課題として①温暖化ガス排出、②人口の増加による

食料不足、国内的課題として③農業の就業者数の減少や高齢化、④自然災害の多発などが挙げられました。これら全てが農学部で取り組むべき課題であり、軽視できないことが示されました。こうした現状の下、中野学科長から農学部フォーラムの趣旨説明として、里地・里山の環境をまもり食料生産活動を支援するため

に人と自然とのつきあい方について、事例を紹介しながら考える旨が紹介されました。背景には、日本の里地・里山が世界的にも生物の多様性の高い領域であり、食と環境の問題を最も顕著に現れているためです。

3 問題提起

3-1 「豪雪中山地の不利を逆手に取った養鯉業の発展」坂田寧代（准教授、生産環境科学科）

錦鯉は新潟県山古志郷で発祥した。養鯉池の造成技術は、土地が狭く水を得にくいという難題を克服して発展し、中越地震後の復興にも大きく寄与してきました。現在、Niigataブランドとして海外展開しています。ここでは、水・土を巧みに利用した歴史を振り返り、豪雪中山地の不利を逆手にとった知恵と工夫を紹介し、中山間地での産業について考えました。

3-2 「50年後に石油がなくなる！—再生可能エネルギーの農業利用—」大橋慎太郎（助教、生産環境科学科）

石油は、多くの産業の発展に寄与してきました。新潟のような寒冷地では、施設園芸の暖房に用いられてきました。しかし、石油は有限の天然資源であるとともに、燃焼時に温室効果ガスを排出します。ここでは、地下水、温泉、雪のもつ物理性を引き出すことで石油の代換エネルギーとして利用する研究や事業を紹介し、持続可能な循環型農業について考えました。

3-3 「中山間地の鳥獣害を防ぐ—野生動物管理の最前線—」望月翔太（助教、生産環境科学科）

近年、全国的に野生動物による農業被害・人身被害が増加している。新潟県でも二ホンザル、ツキノワグマによる被害が多発しています。ここでは、ツキノワグマを対象に、生態と生息状況の研究を紹介するとともに、その管理事例を示しながら人と野生動物との共存について考えました。

3-4 「中山間地で激増する土砂災害」権田 豊（准教授、生産環境科学科）

近年、中山間地での土砂災害が頻発しています。原因として、異常気象、乱開発などが挙げられます。ここでは、日本各地の土砂災害事例を紹介しながら、自然現象である土砂生産・土砂移動が災害に結びつく方策について考えました。

4 パネルディスカッション

森林生態学を専門とする箕口秀夫（教授、生産環境科学科）がコーディネートした。各問題提起者には、複数の質問が寄せられた。中山間地で生じている食料生産、環境保全の問題は、日本の農業の縮図であり、一筋縄では解決できません。しかし、里地・里山、および「ふるさと」への思いを礎に解決に尽力することが大切であることが示されました。

5 おわりに

今回の第20回農学部フォーラムは、農学部同窓会の共催をはじめ、新潟県、新潟市、および新潟日報社から後援頂きました。また多くの方々のご理解とご協力を賜りました。この場をお借りして御礼申し上げます。

なお、農学部ホームページに当日の様子が掲載されています。参照頂ければ幸いです。

URLは、<http://www.agr.niigata-u.ac.jp/index.html>です。



活発に討論が交わされたパネルディスカッション

写真左から、箕口秀夫（コーディネーター）、坂田寧代（問題提起1）、大橋慎太郎（問題提起2）、望月翔太（問題提起3）、権田豊（問題提起4）

国際交流委員会の動き

農学部国際交流委員会委員長 山田 宜 永

今年度における農学部の国際交流の主な動きをご報告いたします。

今年度も、海外の多くの大学から新潟大学農学部と国際交流のための往来がありました。まず、平成26年8月20日～27日に、新潟大学G.P.「グローバルジムシステム」による能力開発プログラム」と連携した国際サテライトセミナー「食文化と伝統 変

月5日には、国際サテライトセミナーの報告会が行われ、海外からの農学部生が自国の食文化を紹介し、食文化を通して食料問題の解決策を語り合う素晴らしいセミナーであったことが報告されました。また、4月8日にはベトナム海洋大学のLe Quoc Tien 副学長が、5月23日には韓国全南ナノバイオ研究員のN

Cheol Kim 博士が、5月26日にはタイイサーンコミュニケーション財団代表 Sanan Chusak 氏が、6月4日にはタイカセサート大学のOranong Naivikul 教授が、6月20日にはモンゴル生命科学大学のTumurbaatar Khenruga 学長が、7月14日～28日にはJICAプロジェクトによるケニア研修員1名が、8月27日にはJICAプロジェクトによるキューバ研修員2名が、9月29日にはスウェーデンウメア大学のLeszek Kiczko 教授が、10月15日には東北農業大学の李翠霞経済管理学院長と東北林業大学の田国双経済管理

学院長が来学されました。今後の共同研究への発展が期待されます。11月10日には、ロシア沿海州農業アカデミーのコミン・アンドレイ学長、イヴァス・オルガ国際課長およびボロディン・イーゴリ農業機械学部准教授を招聘し、大学間交流協定締結のための調印式を開催しました。調印式には、農林水産省大臣官房国際部国際協力課長、在新潟ロシア連邦総領事、新潟副市長も参加されました。共同研究および夏季セミナーへの学生参加を通じて、これまでも強いつながりがありましたが、今回の交流協定の締結により、より一層の交流が期待されます。

わらないもの変わりゆくもの」が開催され、インドネシア・ボゴール農科大学より3名、タイ・チェンマイ大学より3名、マレーシア・プトラ大学より3名、タイ・カセサート大学より4名、ロシア・沿海州農業アカデミーより2名、フィリピン・ロスバノス大学より1名の教員および学部学生を招聘しました。11



国際サテライトセミナー開会式



ロシア沿海州農業アカデミーとの大学間協定締結の調印式



農学部留学生と指導教員との交歓会

11月18日には、恒例の農学部留学生と指導教員との交歓会が開催されました。留学生の家族や国際交流に貢献している日本人院生・学部生も含めて約75名が参加し、中国およびタイからの留学生による催しも披露されるなど、他学部も羨ましが

る賑やかな夕食会となりました。

2013年度新潟大学農学部同窓会 事業費決算報告（平成25年5月1日～平成26年4月30日）

1. 収入の部 (円)

科 目	予 算	決 算	増 減	備 考
基金収入からの繰入	4,550,000	4,550,000	0	
前年度繰越	192,189	192,189	0	
利子・雑収入	403	423	20	利息 423
合 計	4,742,592	4,742,612	20	

2. 支出の部 (円)

科 目	予 算	決 算	増 減	備 考
1. 事務局費	570,000	565,976	▲ 4,024	全学交流会参加補助、消耗品、通信費、謝金等、パソコン購入・付属品等
2. 会議費	460,000	287,820	▲ 172,180	常任幹事会支部役員出席旅費等
3. 名簿情報維持管理費	60,000	52,500	▲ 7,500	名簿データメンテナンス
4. 卒業祝賀会費	700,000	700,000	0	
5. 退職者記念品費	24,000	21,000	▲ 3,000	定年退職者（職員 2 村松農場技官）
6. 嵐丘庭維持費	100,000	45,765	▲ 54,235	中庭下刈り、前庭は一部大学負担、クリーン作業お茶代等
7. 「松涛」発行費	1,450,000	1,304,871	▲ 145,129	「松涛30・31合併」「しおり」印刷、郵送等
8. 慶弔費	50,000	48,861	▲ 1,139	弔電、生花等
9. 支部活動助成費	350,000	350,000	0	8支部（6支部35,000円、新潟県・首都圏支部各70,000円）
10. 学文活動助成費	250,000	113,263	▲ 136,737	全国農学部長会議付用一部物品事前支援、F Cシンポ、新大G P、国際シンポ補助
11. 全学同窓会負担金費	376,000	375,005	▲ 995	
12. ホームページ費	70,000	18,125	▲ 51,875	60周年記事、松涛30・31合併号等掲載
13. 出前講義旅費助成費	240,000	275,298	35,298	教員による高校等への出前授業、アドミッションフォーラム等
14. 予備費	42,592	0	▲ 42,592	
合 計	4,742,592	4,158,484	▲ 584,108	

3. 差引残高（A－B）584,128円 次年度への繰越金

2014年度新潟大学農学部同窓会 事業会計予算（平成26年5月1日～平成27年4月30日）

1. 収入の部 (円)

科 目	本年度予算	前年度決算	増 減	備 考
基本収入からの繰入	4,200,000	4,550,000	▲ 350,000	
前年度繰越	584,128	192,189	391,939	
利子・雑収入	423	423	0	
合 計	4,784,551	4,742,612	41,939	

2. 支出の部 (円)

科 目	本年度予算	前年度決算	増 減	備 考
1. 事務局費	500,000	565,976	▲ 65,976	役員会・通信・電話料・謝金等
2. 会議費	460,000	287,820	172,180	常任幹事会旅費等
3. 名簿情報維持管理費	60,000	52,500	7,500	名簿情報メンテナンス等経費
4. 卒業祝賀会費	700,000	700,000	0	卒業祝賀会費補助
5. 退職者記念品費	24,000	21,000	3,000	退職者 2 名
6. 嵐丘庭維持費	100,000	45,765	54,235	
7. 「松涛」発行費	1,300,000	1,304,871	▲ 4,871	「松涛」「しおり」印刷、発送等
8. 慶弔費	50,000	48,861	1,139	弔電、生花代等
9. 支部活動助成費	350,000	350,000	0	支部活動助成（6支部@35,000首都圏、新潟県@70,000）
10. 学文活動助成費	250,000	113,263	136,737	3大学合同研修会、F Cシンポ、新大G P、農学部フォーラム等
11. 全学同窓会負担金費	376,000	375,005	995	分担金
12. ホームページ費	70,000	18,125	51,875	H P メンテナンス等経費
13. 志願者確保対策助成費（出前講義旅費助成費）	270,000	275,298	▲ 5,298	高校訪問、アドミッションフォーラム等
14. 全国農学系学部長会議助成費	100,000	0	100,000	幹事校として今年度限りの諸経費への助成
15. 予備費	174,551	0	174,551	
合 計	4,784,551	4,158,484	626,067	

2013年度新潟大学農学部同窓会 基金会計報告（平成25年5月1日～平成26年4月30日）

1. 収入の部 (円)

科 目	前 年 度	今 年 度	増 減
繰越金	55,782,027	41,045,271	▲ 14,736,756
基金収入（入会金）	5,103,360	4,603,610	▲ 499,750
利子	68,339	32,359	▲ 35,980
60周年募金	7,020,000	3,407,720	▲ 3,612,280
60周年式典参加費	300,000	2,285,600	1,985,600
60周年式典祝儀	0	80,000	80,000
合 計	68,273,726	51,454,560	▲ 16,819,166

2. 支出の部 (円)

科 目	金 額	備 考
事業費繰入	4,550,000	
60周年事業経費	9,324,533	
嵐丘庭工事残額支払	12,842,025	
合 計	26,716,558	

3. 次年度への繰越金 (円)

科 目	金 額
収入合計	51,454,560
支出合計	26,716,558
繰 越 金	24,738,002

注）2013年度は、60周年事業遂行のための残りの経費を、基金から支出した。

学部だより

廣田秀憲先生を偲んで

酒 井 隆

(平2農学研究科)

新潟大学名誉教授であられた廣田秀憲先生が、平成26年2月5日にお亡くなりになり、約1年が経った頃に「松涛」編集委員会より、「廣田秀憲先生を偲んで」との原稿依頼があった際には少し戸惑いました。諸先輩たちが居られるなかで、若輩者の私が追悼の一文を書くことにはためらいがありました。在学中はもちろん卒業後も公私にわたり相談に乗ってもらい、廣田先生に最も長きにわたりご指導頂いたのは私ではないかと思ひ、この依頼を受けさせて頂きました。そこで、ここに卒業生の一人として先生のお人柄を偲び、感謝と哀悼の意を表し、ここに一文を記させて頂きます。

私が、廣田先生と初めてお会いしたのは大学院入学時になります。他大学の農業土木系の学部からの入学だったせいでしょうか。頻りに大学の裏の圃場に出て指導して頂いたのを

覚えています。特に先生は、現場を大事にされる先生で、院生の頃は私が車を出し、一緒に新潟県内の農家を訪問いたしました。先生は、初めて訪ねる農家の方にも気さくに話し掛けられ、いつの間にか家でお茶とお菓子をこちそうになり、場合によってはお酒を酌み交わす仲間になっていたのを思い出されます。これも先生のお人柄がなせる技なのだなと感心させられたほどです。そのせいででしょうか、先生と一緒に歩いているとたくさん農家の方から声を掛けられたのを覚えています。

また、先生は本当に筆まめな方で、訪ねられた農家や試験場などに、その後、感謝の一言を添えて手紙や資料などを送付されていたそうです。一度インターネットで、そのような内容を見た際、このような人としてぬくもりが感じられる行為は、廣田先生だからできることなのだと感心させられました。筆無精な私にはとうてい真似のできないことです。

このように書き始めると先生との思い出が後から後から出てきますが、今回このような文章を書かせて頂いたおかげで、改めて先生のお人柄に触れられたような気がいたしました。廣田先生をご存知の方は、多かれ少なかれきつとこのような先生の

お人柄に触れた経験があたりだと思えます。廣田先生を偲ぶ文章としては、私的な事ばかり書いてしまいましたが、先生のお人柄を文章に書き残すことで、私からの先生のご厚誼に対する感謝の気持ちと哀悼の意にかえさせて頂きたいと思っています。最後に廣田先生、どうぞ、安らかにお休みください。

合 掌

中野俊郎先生を偲んで

栗生田 忠雄

(昭62農工)

かねてより病氣療養中であつた中野俊郎先生は、昨年二〇一四年四月にご逝去されました。定年から七年、あまりにも早い訃報が残念でなりません。謹んで哀悼の意を表します。

さて、中野先生は昭和四一年に新潟大学農学部林学科砂防学教室を卒業されました。同年四月に農学部の助手として採用され、平成三年に助教に昇格しました。その間、平成二年には東京大学から農学博士の学位を取得されました。このように中野先生は、学生時代から定年退職まで新潟大学農学部の良心として教育・研究・大学運営ならびに社会貢献の各分野に文字通りバイタリ

ティーを漲らせてきました。研究では、三軸圧縮試験器を巧みに操りながら考究した「砂の応力・歪み関係の解明」、新通ステーションを中心に調査した「水田暗渠の排水性向上のための機能解明」などの分野で著しい成果を上げてこられました。教育では、基礎学問涵養のため、測量学をはじめとした実習を学生の先頭に立つて精力的に取り組んでこられました。また、農学部の教職員野球チームではキャッチャーとしてチームの要を果たすとともに、職場の和を大切にしてこられました。このように中野先生は、公私に亘り活動的でたくましく、また温和な性格の持ち主でした。このため、男女問わず中野先生を慕う多くの学生が、卒論指導を希望していました。冗談を交えながら、でも真剣に研究指導する中野先生の姿が今でも目に浮かびます。

中野先生は定年後、地域での活動(社会貢献)に力を注ぐと仰っていました。これからの活躍を期待していただけに残念です。中野先生が蒔いた社会貢献の種は、微力ながら私が育て大きくします。どうぞ天国でゆっくりお休み下さい。

合 掌



新任教員紹介

農業生産科学科

助教 深井英吾



平成二十六年四月一日付にて着任いたしました深井英吾と申します。

千葉県出身で、大学進学後は仙台で10年間、その後オーフス(デンマーク)、つくば、木更津、三島等で過ごし、専門は植物遺育種学で、学位はアラナの自家不和合性の研究で取得しました。学位取得後は、マメ科のモデル植物であるミヤコグサのトランスポゾンの研究を中心に、イネその他植物を材料とした分子遺伝学的研究を行って参りました。

着任後は、マメ科植物の農業形質を決定する遺伝子の同定、トランスポゾンの農業利用の研究、マメ科やイネ科の生殖の研究等に着手する予定です。また、その他農業上の重要課題についても、研究を展開して参る所存です。

本学の教育・研究のより一層の発展に微力ながら貢献して参りたいと考えております。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

農学部 of 動向

学会賞等受賞

- 山田宜永教授(農業生産科学科)、祝前博明教授(農業生産科学科・現京都大)、本間航介准教授(農学部FC佐渡ステーション(演習林))2014年度 Zoological Science Award および 藤井賞「Genetic diversity and structure in the Sado captive population of the Japanese crested ibis」
- 門脇基二教授(応用生物化学科)飯島藤十郎記念食品科学振興財団「食品科学賞」(栄養によるタンパク質代謝調節と米の新規生理機能性に関する研究)
- 西海理之准教授(応用生物化学科)第60回国際食肉科学会議(Uruguay) Best Oral Presentation Award「Combined effects of high pressure and sodium hydrogen carbonate on beef texture and color」
- 中井博之助教(応用生物化学科)第3回食の新潟国際賞21世紀希望賞「ホスホリラーゼを活用したオリゴ糖製造技術の開発」
- 太田能之(平成4年修了・農学研究科・畜産学専攻)日本家禽学会賞「ニワトリ胚および初生ヒナの栄養改善による生産能の向上」
- 渡邊源哉(平成23年卒業・応用生物化学科)日本畜産学会優秀発表賞「家禽への低リジン飼料給与による食肉の呈味変化とその代謝機構の解析」
- 上田大次郎(平成25年卒業・応用生物化学科)日本農芸化学会2014年度大会「トピックス賞」「スクアレンの両末端環化・オノセロイド合成酵素の初めての同定および龍涎香主成分 ambrein の酵素合成」
- 上田大次郎(平成25年卒業・応用生物化学科)第58回香料・テルペンおよび精油化学に関する討論会「バストブレゼンテーション賞」「龍涎香の主成分アンブレインの酵素合成」
- 細野匠(平成25年卒業・応用生物化学科)第60回国際食肉科学会議(Uruguay) Best Oral Presentation Award「Isolation and purification of decorin from bovine skeletal muscle and its structural changes under high pressure」
- 鈴木哲也准教授(生産環境科学科)農業農村工学会・研究奨励賞「アコースティック・エミシジョン法を用いた農業水利施設の機能診断技術の開発に関する研究」

○森口喜成助教(生産環境科学科)第13回農学進歩賞「無花粉スギの育種年限の短縮にむけた分子遺伝学的研究」

○森口喜成助教(生産環境科学科)平成26年日本森林学会奨励賞「The construction of a high-density linkage map for identifying SNP markers that are tightly linked to a nuclear-recessive major gene for male sterility in *Cryptomeria japonica* D. Don」

○小笠真理恵(平成25年修了・自然科学研究科環境科学)農業農村工学会京都支部「研究奨励賞」「水田を介した流域内の放射性セシウムの移動」

○平野亮将(平成25年卒業・生産環境科学科)農業農村工学会京都支部「研究奨励賞」「水田を介した流域内の放射性セシウムの移動」

○阿部晴恵助教(農学部FC佐渡ステーション(演習林))新潟大学学長賞(若手教員研究奨励)「Resilient plant-bird interactions in a volcanic island ecosystem: pollination of Japanese *Camellia* mediated by the Japanese White-Eye」

学会等の開催

○砂防学会(平成26年5月28日〜平

成26年5月30日) 平成26年度砂防学会定時総会並びに研究発表大会、朱鷺メッセ・新潟コンベンションセンター、大会実行委員長長川遼洋教授、生産環境科学科

○農業農村工学会(平成26年8月26日) 平成26年8月29日) 平成26年度農業農村工学会大会、朱鷺メッセ、大会委員長森井俊広、生産環境科学科

○日本応用糖質科学会(平成26年9月24日) 平成26年9月26日) 平成26年度大会、朱鷺メッセ、大会委員長大坪研一教授、応用生物化学科

○植生学会(平成26年10月17日) 平成26年10月21日) 植生学会第19回大会、朱鷺メッセ、大会会長崎尾均教授、農学部F C佐渡ステーション(演習林)

学位取得

○渡邊祐輔(平成9年卒・平成11年修了) 農業生産科学/生物生産、博士(農学) 平成26年10月

○清水元樹(平成21年卒・平成23年修了) 農業生産科学/生命・食料科学、博士(農学) 平成26年3月

○温井祥太郎(平成21年卒・平成23年修了) 農業生産科学/生命・食料科学、博士(農学) 平成26年3月

○伊藤学(平成21年卒・平成23年修了) 応用生物化学科/生命・食料科学、博士(農学) 平成26年3月

退職

長年、当農学部のため多大な貢献をされた農業生産科学科青柳齊教授が平成26年10月末日をもって退職されました。

長い間積み重ねてこられたご功績に心から感謝申し上げます。ありがとうございます。

教員計報

廣田秀憲名誉教授(農業生産科学科) 平成26年2月ご逝去。

中野俊郎元准教授(生産環境科学科) 平成26年4月ご逝去。

柳沢栄助元農専職員、平成25年11月ご逝去。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

会員計報

次の会員の計報が事務局に届けられています。(卒年次順・五十音順)

真保 昇(昭23・3農専・農芸)
牛腸 和雄(昭24・3農専・農芸)
斎藤 正(昭24・3農専・林)
蝶名林 修(昭31・3総農)

平松 勲(昭31・3農学)
吉川 敬吉(昭32・3農学)
金子 恒之(昭33・3林学)
福村 博(昭33・3林学)
藤巻 圭介(昭33・3農学)
福島 道一(昭34・3農学)
井澤 弘一(昭38・3農学)
佐藤 健治(昭38・3農学)
五十嵐光史(昭41・3農学)
山本 勝彦(昭43・3農工)
高木 信雄(昭56・3林学)
長谷川太一(平10・3生産環境)
謹んでご冥福をお祈りいたします。



60周年を記念してエントランスの化粧直しを行いました

編集後記

一月上旬、農学部で松涛の編集会議があり、会議後に嵐丘庭を散策した。凛とした空気の中、落葉樹は葉を落し、常緑樹はまだ小さいがその緑は活力を感じさせる。思い起こせば一昨年の六月から、約二十か月、大学職員や在校生の皆様等からの草取りなどの管理をしていただき、それぞれの苗木により生育の差はあるものの、着実にその生長を感じさせてくれる。学舎は耐震工事を終えてリフレッシュされ、その中庭にはベンチがある。春・夏・秋と木漏れ日の中で学生達が集い、語らう光景が目には浮かび喧騒が聞こえてくるような気がする。今回の特集のひとつは、全学の広報誌のものを掲載させて頂いた。研究室の恩師として先輩から後輩へ人をつなぎ育てていくのが、大学であり農学部のような気がする。同窓生の皆さんも機会を見付け、是非、研究室、恩師、先輩、後輩そして日々色を変える嵐丘庭を訪ねていただければと思う。



(H・W)